相反する世界

kapebarasan

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネウロイの現れなかった世界…

そこは人類同士が憎み合い命を散らす戦争に明け暮れる世界だった。

数多の戦いの中で掻き消えていった彼女らはもう一つの世界で何を見、何を思うのか…

共通の敵（ネウロイ）が現れなかった世界で散っていったウィッチたちがストライクウィッチーズの（ほぼ）世界に行く予定のお話です。

目次

序章：バトル・オブ・ブリテン ―― 1
序章：珊瑚海海戦 ―― 7
序章：ドレスデン ―― 12
序章：桜花 ―― 18

序章：バトル・オブ・ブリテン

そこは魔法のある世界、ウィッチと呼ばれる彼女らは空を飛び治療や遠見等の力を使う事ができる。

本来ではウィッチ達は国という垣根を乗り越え協力しネウロイと戦う筈だったが…

２０世紀の初め凄惨な欧州大戦を経験した後の世界に『共通の敵（ネウロイ）』は現れなかった…

＊

欧州大戦後莫大な賠償金による不況に苦しんでいたカールスラントワイマール共和国は一人の政治家が国家元首についた事でその運命が動き出す。

時は流れ１９３９年９月1日オストマルク共和国などを併合し強大化しつつあるカールスラント第三帝国はプロシアと本国を繋ぐポロニア回廊を手に入れるべくポロニア共和国へ宣戦布告をする。

これが後に世界は地獄を見たとも評される第二次世界大戦の幕開けとなる。

序章　　バトル・オブ・ブリテン

カールスラントは破竹の勢いでポロニア全土を制圧し返す刀で中立であったネーデルラント共和国へ侵攻、カールスラントとの国境に敷設されたマジノ要塞を迂回され不意を点かれたガリア共和国は有効な対策をすることができぬまま首都を制圧され政府はアフリカの植民地への亡命を余儀なくされる結果となる。

１９４０年７月　カールスラント第三帝国首都　ベルリン

豪華な調度品が置かれている執務室の椅子にちょび髭が目立つ男が一人座って書類や地図に目を通し、机の前には太った男が立っている。

「ブリタニア人共は同盟国がいとも簡単に吹き飛ばされたというのに和平に応じようとしない…かくなる上は上陸作戦しかあるまい、そうであろう?」

ヒトラーは机の前に立つ男に尋ねる。

「その通りあります。しかし海軍は緒戦で艦艇を多数失い作戦には否定的です。」

ゲーリングはヒトラーに答える。

「その通りだたから君をここに呼んだのだよ…」

ヒトラーの言葉にゲーリングは眉をひそめる

「と言いますと?」
ゲーリングが尋ねる
「空襲でロンドンを焼き、混乱させ奴らの戦意を削ぐ…そして敵の航空戦力を叩き潰せば空軍の優勢を以て敵海軍の目を盗み陸軍をブリタニアへ運ぶ…そういう事だ…」
ヒトラーの言葉にハッとした様子のゲーリングは
「その作戦に私の空軍が必要ということ! 不肖ゲーリング総統閣下のお役に立つべく早速準備に取り掛かります!」
そうして後にバトル・オブ・ブリテンと呼ばれる戦いが幕を開けた…

＊

ブリタニア　ケント県　飛行場　１９４０年　９月　１５日

基地のサイレンがけたたましく鳴っている…カールスラントの奴らが迫っている合図だ
ブリタニア空軍少尉『リンダ・エリオット』は自身の愛機であるスピットファイアＭ

k．2を履く

「リンダー出ます！」

宣言し滑走路から飛び立つ…仲間と編隊を組み迫るカールスラントの敵機襲来に備える。

「敵はどちらに？」

管制に尋ねるがカールスラントの欺瞞工作によって敵の正確な攻撃目標が不明だと告げられる。

「でも…こっちには来てるのね…」

彼女は自身の固有魔法である『探知』で目の前遥か先にいる敵機の反応を感じ取っていた。

「正確な数はわからない…でも」

引き下がる訳にはいかない！私達の後ろにはブリタニアの市民がいるのだ！

自身に言い聞かせるように覚悟を決める。

探知では益々敵との距離が縮まるが未だに敵機は見当たらない…

「…ッ!!上だ！」

誰かが叫んだ瞬間隣を飛んでいたウィッチのストライカーが爆ぜる。

散開し上空から襲いかかってくるカールスラントのウィッチの攻撃を避け反撃に転

ずる。
「そこだ！」
降下した敵の背後に回り込み攻撃をする。
防御も間に合わず攻撃を受けてしまった敵機は力が抜けるように落ちていく…
「一機撃墜！」
リンダは落ちていく敵機から目を離し次へ向かう
「助けて！ママ！」
まだ新人のウィッチが背後を取られてしまっていた。
「間に合え！」
新人を狙っていた敵の横腹に攻撃をする。
「…っ！」
敵はこれに気が付くと攻撃を躱しこちらへ標的を変える。
「落ちろ！」
互いに格闘戦の状態になり攻撃を繰り返すも決定打にはならない…
「やるな…ブリタニア人だが…」
カールスラントのウィッチが突然視界から消える。
「…?!」

突然居なくなったことに困惑した瞬間背中に衝撃が走る！
「…なにこれ」
胸元に手を当て見ると手が赤く染まっている。
撃たれた…そのことに気が付いた瞬間彼女は海に向けて糸が切れた人形のように落ちていった。

＊

ブリタニア空軍所属
リンダ・エリオット大尉　　１９２３～１９４０

序章：珊瑚海海戦

大扶桑帝国…この国は信長公による開国政策は行われず、史実通りの鎖国の後に開国された国である。

欧州の統治機構を参考にして発展してきたこの国は欧州大戦においても微力ながらカールスラント帝国と戦いかの国の植民地の一部を委任統治領として手に入れていた。

しかし満州への侵攻や満州国の設立果ては１９３７年に起きた盧溝橋事件に端を発する扶支戦争の勃発により国際的孤立を強めつつある。

そこで欧州のカールスラント第三帝国及びロマーニャ王国と同盟を結びその連帯を強めようとしていた。

１９４０年７月に欧州の戦線に置いて脱落したガリア共和国の植民地であったインドシナへ進駐を始めたことにより更に孤立を深め国際連盟による非難をうけ当組織を脱退してしまう…

時は流れ１９４１年１２月８日リベリオン合衆国の太平洋根拠地ハワイ真珠湾を扶桑帝国が奇襲した事により太平洋戦争又は大東亜戦争と呼ばれる戦争の幕が切って落とされる。

序章：珊瑚海海戦

リベリオン合衆国海軍　空母レキシントン甲板

ミシェーラ＝ガーソン曹長

「扶桑の奴らがアスウトリス（オーストラリア）を締め上げるために付近に海軍を派遣してるらしい…」

同時期に入隊したサマンサが自身のストライカーの調整をしながら話しかけてくる。

「そうだとしても、ハワイの仕返しをしてやるだけだ」

私はそう返すと自身のストライカーの調整を続ける。

数時間後に艦載機のパイロットが集められ作戦の概要を伝えられる。

扶桑のウィッチや航空機がこちらに迫っているとのことだった。

急いで出撃の準備をしストライカーを履く

「ミシェーラ機出ます。」

＊

合図とともに飛行甲板を駆け抜け空へ飛び立つ、自身の所属する飛行隊に合流し扶桑の攻撃隊の迎撃へ向かう

リベリオン軍は数日前に扶桑の空母を2隻沈めたと報告があったことで、この敵機の攻撃も破れかぶれの攻撃に違いないと誤認してしまっていた。

実際は沈没したのは空母祥鳳のみであり空母翔鶴は損傷こそしたものの艦載機は既に飛び立っており、彼らは空母瑞鶴に着艦し無事だったのである。

「各機距離を保ち警戒せよ」

隊長からの指示を受けて索敵にあたる。

「おい！」

突然僚機のサマンサが話しかけてくる。

「なんだ？任務中だぞ」

私が返すと彼女は

「この前のポーカーの貸しの３０$絶対返せよ」

と言う

「生きて帰れたらな」

私がそう答えると隊長から私語を慎めと怒られる。

数分後別の隊が扶桑攻撃隊と接触したとの報告が入ったためそちらへ向かう、現場の

空域は敵のウィッチと戦闘機こちらのウィッチと戦闘機が入り混じった混戦となっていた。

「攻撃！」

命令が下されると同時にこちらを見つけた扶桑の戦闘機が攻撃を仕掛けてくる。

これを躱し反撃をする、集中攻撃を受けた扶桑の戦闘機は火を吹きながら海面に叩きつけられる。

「やってやったぞ！」

そう叫び次の標的を探す…しかしこのとき私は混戦の中敵と追い追われを繰り返す中で味方と離れてしまったことに気付いていなかったのだ

「皆は何処だ？」

気が付いた時には私は所属隊を見失い敵のど真ん中に取り残されてしまっていた。

「不味い！」

そう思った瞬間に扶桑のウィッチ２人から攻撃を受ける。

私は必死に躱すが距離もすでに近く格闘戦に持ち込まれてしまっていた。

私のＦ４Ｆでは扶桑の零式と格闘戦はできない…私はなんとか振り切ろうと逃げるが適は２人で巧みに追い立て私を追い詰める。

１人が攻撃しこれを躱した瞬間衝撃が走る。

撃たれた…被弾箇所はストライカーのエンジン部、すでに火を吹いていた。
「サマンサ…３０$返せないな…」
そう呟いた瞬間ストライカーの燃料に引火し爆発した。

＊

ミシェーラ＝ガーソン中尉　１９２６～１９４２

序章：ドレスデン

カールスラントは追い詰められていた。

１９４１年に開戦したオラーシャ社会主義連邦との戦争はモスクワ攻略の失敗を契機として次第に劣勢に回り１９４４年に赤軍が行ったバグラチオン作戦にて完全に敗北し結果としてカールスラントの中央軍集団が壊滅する結果となった。

津波のように攻め立てるオラーシャ赤軍によってマジャール王国（ハンガリー王国）の首都ブダペストが陥落するという状況に陥っていた。

しかも東だけではなく１９４４年６月６日にガリアのノルマンディーに連合軍が襲来し激しい戦闘の果に橋頭堡を築いた連合軍は破竹の勢いでガリア全域を解放しカールスラント本土への侵攻を進めていた。

＊

１９４５年２月１５日　カースルラント空軍基地

「レーダーがこちらへ迫る敵爆撃機を捉えた。先日の借りを返す時だ！出撃せよ！」

基地のサイレンが鳴り放送が入る。

連合軍による空襲だ

カルラ　＝　リリエンクローン少佐は基地を走り格納庫へ辿り着くと自身の機体であるＦｗ―１９０Ｄ―６を履く、彼女は整備員からフリーガーファウストを受け取った後に大きいサイドバックのようなものを受け取るとそれを腰に巻き付けつつ滑走路へ出る、空襲により施設の損傷も激しいが滑走路上の瓦礫は撤去されなんとか飛べる様になっていた。

「カルラ出るぞ！」

カルラのストライカーが滑走路を抜け空へでる。

「おそらく敵の目的は最近の攻撃から見てドレスデンだ、各機は上昇し敵爆撃機の迎撃に努めろ！」

司令部からの指示を聞き、敵を迎撃すべく高度を上げる…

「飛べるのが私だけとはな…」

カルラはそう呟くと高度を上げていった。

カールスラント上空　リベリオン軍所属　Ｂ―１７

「各機警戒を厳としろ！」

爆撃機隊の隊長が各機に指示を出す。

彼らは編隊を組み目標に向けて飛んでいく…

「いたぞ！カールスラントの迎撃機だ！」

編隊の端にいたＢ―１７の乗員が叫んだ瞬間、ロケットの発射音と共に爆発と衝撃を受けＢ―１７が落ちていく…

「８番がやられた！」

「護衛は何をやってるんだ！」

突然の敵機襲来に慌てるリベリオン軍迎撃機が爆撃機を固め周囲を警戒する。

「クソッ！雲を使われてる！雲の上に出るぞ！」

隊長は各機に命令すると雲の上に出るべく上昇を始める。

「いたぞ！」

隊長は報告を聞き急いで確認をとる。

カールスラントのウィッチが機銃を躱しながら本機の直近を通過していく所を目にする。

「あいつは何をしているんだ?」
カールスラントのウィッチが攻撃もせずにわざわざ爆撃機に近寄るという危険を冒す事に疑問を感じた瞬間
「アァ!!」
上部機銃座の乗員が悲鳴を挙げる
「手榴弾だ!」
乗員が叫んだ瞬間に機体が爆発し制御ができなくなり落下を始める。
司令を失ったリベリオン爆撃機隊は一時的な混乱に陥り対応が後手に回ってしまう

*

「次だ…」
カルラはそう呟くと次の標的へ移動を始める。
彼女はM24手榴弾(ポテトマッシャー)を針金で連結し爆弾部に粘着剤を塗布したものをサイドバックから取り出す。
爆撃機に向け移動する彼女のそばを銃弾が通過する。

「邪魔だ！」
カルラは護身用のＭＰ４０をリベリオンの護衛に向けて発砲する。
当たりはしないが防御や回避をするために一時的に攻撃が止む、その隙をつき爆撃機に接近すると手榴弾をすれ違いざまに投げつける。
手榴弾が付着した爆撃機はなす術なく爆発し回転しながら地面に向けて落ちていく…
しかしリベリオンもタダではやられまいとカルラに攻撃をする。
「これ以上やらせるな！あいつを止めろ！」
リベリオンの護衛戦闘機・戦闘脚隊の隊長が叫ぶ
「冷静を取り戻したか…リベリオン…」
カルラは自分に向けられる熾烈な攻撃を躱すので手一杯となっていた、合計で爆撃機を3機落とせたのは奇襲が成功したからであり、混乱を収めたリベリオンはカルラを確実に始末すべく集中攻撃をする。
カルラはこれらの攻撃を躱し防御を続けるが遂に限界が訪れる。
「死ねぇ！カールスラントのアバズレ！」
誰かが放った弾丸がカルラのシールドを貫きそのまま彼女の胸に命中する。
「撃たれた…！」

彼女がそれを認識したときには既に彼女の体は地面に向けて落ちていく最中であった。

「やっだぞ！倒したぞ！」

上空でリベリオンのウィッチが歓声を上げている…

カルラはそのまま雲の中へと落ちていった。

＊

カールスラント空軍所属

カルラ　＝　リリエンクローン大佐　１９２４～１９４５

序章：桜花

大扶桑帝国は１９４１年にリベリオンに対して真珠湾のへの奇襲という宣戦布告をして以来破竹の勢いで連合国の植民地という植民地を開放し戦線を広げていた。

しかし１９４２年６月７日ミッドウェーにおける海戦において扶桑帝国は４隻の空母を喪失するという大敗を喫し、以後次第に戦いの優位性は連合国へと傾くことになる。

開戦初頭の勢いを失った扶桑帝国は連合軍の反撃を前に敗北を重ね、撤退や増援、補給のために送った輸送艦は目的地に辿り着く前にリベリオンの潜水艦に尽く沈められた。

さらに１９４４年にマリアナ諸島を失陥するとリベリオンの戦略爆撃機による空襲は苛烈さを増し扶桑の都市という都市が焼き払われることになる。

１９４５年３月２６日には硫黄島を失陥し連合国は次なる標的として同年４月１日に沖縄の攻略を始めた、戦艦の艦砲射撃による鉄の暴風により防衛陣地を破壊され劣悪な環境の中凄惨な戦いが繰り広げられるも徐々に扶桑軍は追い詰められ沖縄の失陥は誰の目から見ても時間の問題であった。

＊

序章…桜花

１９４５年４月６日鹿児島県知覧飛行場にてまだ若すぎる年齢の少女たちが本来であれば着ることのないであろう飛行服を着、その手には小さな盃が乗っていた。

「また会おうね」

「大きいのにぶつかれよ！」

「お父さん…お母さん…私はやり遂げます…」

みな最後の別れや決意を胸に盃を飲み干す。

「じゃあ次に会うときは、靖国で！」

井土杏美上等飛行兵はそう言うと用意された機体(棺桶)に乗り込む

「頑張れよ～！」

滑走路の脇には教官などが集まり激励の言葉を浴びせている。

皆、零式戦闘脚５２型に自爆用の爆弾を取り付けたものを起動し皆ぎこちなくも空へ

次々飛び立ってゆく

「井土出ます！」

そう言うと井土機も飛び立ち上空で待つ『戦友』と合流し先導機の指示を受け目標へと向かう…

数十分程経った頃彼女らはリベリオンの前哨艦隊に補足され迎撃にでてきたリベリオンのウィッチから攻撃を受けていた。

「雲に隠れろ！」

「ひかり！ひかりがやられた！」

「どうすればいいの？」

練度も装備も不足している彼女らはまともな抵抗をすることもできぬまま海へと叩き落とされていく…運の良かった？者はリベリオンの前哨艦隊の駆逐艦へ突撃する。

そんな地獄のような光景の中、井土は味方とはぐれ、逃げ込んだ雲を突き抜けると真下に目的であったリベリオンの空母を見つける。

「あれだ！」

井土は覚悟を決め空母へ突き進む、彼女に気が付いたリベリオン艦隊は対空砲を彼女に撃つ、しかし低空を飛びなおかつ戦闘機より的の小さいウィッチには中々当たらない…

「なんで当たらない！」

「魔力信管のばすだろ！」

彼ら(リベリオン)は気付いていなかった…魔力に反応して起爆する魔力版ＶＴ信管ではなく通常戦闘機用の信管を付けた弾を撃ち出していたことに…

「いけぇぇぇ!!!」

井土は魔力切れを感じつつも最後の力を振り絞りリベリオンの空母に向けて突進する。

次の瞬間、リベリオンの空母の横腹に叩きつけられた井土のストライカーが爆発した…

「イカれてやがる…とんでもないバカだ…」

炎の柱を上げて自爆したウィッチを目の当たりにしたリベリオンの海兵はそう呟救助へ向かった。

＊

大扶桑帝国海軍神風特別攻撃隊所属

井土　杏美二等飛行兵曹　　１９３１～１９４５